

序にかえて—研究成果発信装置としての実験展示

中村 ひろ子

はじめに

2007年11月、COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」の最終年を迎え、その研究成果を展示を通して多くの方々に発信するため、私たちは実験展示「あるく—身体記憶—」を神奈川大学日本常民文化研究所参考室において開催した。本報告書はその記録である。

展示という発信の手法はさまざまな領域で用いられており、私たちにとって身近な博物館にあってはもとより、その情報発信としての有効性は論じるまでもなからう。しかし、COEといったプロジェクト研究の成果発信にあってはその中心は報告書、論文集に代表される刊行物にあり、シンポジウムやデータベースなどウェブ上での発信はみられても展示による発信の試みはほとんどみられない。博物館においては不可欠な展示も、研究成果の発信においては選択肢の一つに過ぎないのである。そこで私たちがあえてこの展示という手法を用いて発信したことの意味とその可能性について記し序に代えたい。

発信のあらたな広がり

研究成果の発信は従来研究者を中心とした専門家に向けてであった。しかしどのような先進的研究もそれが時代の、社会の要請を受けてのものであるとすれば、成果がより広く社会に向けて発信され還元されるべきなのは当然であり、さらに今求められているのは目にみえる形で直接ひとりひとりに向けて発信することではなからうか。誰もが観覧者という形で受信者になりえる展示は、限られた空間、時間における発信ではあるが、従来の発信先とは異なるあらたな広がりの可能性をもつものであろう。展示

による発信の第一義をここに見たいと思う。

しかし発信にあたっては研究者間で共有する概念や論理を前提とすることはできない。そこで今回は課題を「非文字資料の発見」に置き、観覧者ひとりひとりが非文字資料に出会う場を提供することとした。論文などとは異なり展示による発信にあっては観覧者となるであろう多様な人々との接点となる課題を研究成果のなかに求めることが欠かせない。非文字資料の中から「身体技法」を選択したことのひとつは、「身体技法」が身体化された記憶として誰もが所有する非文字資料であるからである。観覧者ひとりひとりが所有するものでありながら所有が意識されることのほとんどない身体化された記憶を展示を通して意識化することで「非文字資料の発見」へ誘うことを考えた。もう一つが今まで展示という形で発信されることのなかった身体技法を展示するという実験的展示となりえる可能性をみたからである。身体技法を展示を通して伝えるためには図像資料や実演といった「非文字資料を用いた非文字資料の展示」の実験的試みともなろう。こうして身体技法の中でも日常生活の中の「あるく」を選択して展示を展開した。

研究のあらたな広がり

研究成果の発信とはその成果がいかに新たな発見に満ちたものであるのかというその到達点を示すことであろう。しかし、今回展示として提示したのは到達点というよりは私たちが「あるく」を探るための手がかりとした図像資料であり、その図像資料から読み取ったさまざまな歩き方を実際に試みることのできるプログラムである。発信者である私たちがかつての歩き方を探る過程や手続を含め一つの仮

説、想定として提示することで、それをめぐり観覧者との対話が可能になることを望んだ。観覧者がそこに用意されたプログラムにそってさまざまなあるき方を実際に試みることで自らの身体を使ってその仮説を検証し、そこに示された図像資料を手がかりに新たな発見をし、論議に加わることでできる場としての展示を志向したのである。

このプログラムにそって歩いた観覧者からの同意や異議申し立てはそこに提示した仮説への同意や異議申し立てである。その一端は体験の同伴者となったインストラクターとの会話やアンケートに記された言葉として発信者である私たちに届けられ、展示に、さらには研究にとフィードバックされ、修正が加えられるという回路は、展示が発信だけでなく観覧者を組み込んだ研究の一環として位置づけられる可能性を示しているのではなかろうか。それは観覧者にとってもプログラムへの参加が単に歩くという体験への参加にとどまらない、広い意味での研究への参加となる可能性を示していよう。

それはまた展示での発信者（研究担当者）と受信者（観覧者）が時に発信者（観覧者）と受信者（研究担当者）に入れ替わるというコミュニケーションのありようを示しており、このような研究成果をめぐっての両者の対話の成立は刊行物等を介しては成り立ちがたいものであろう。

ただそこでは、このようなコミュニケーションが成立しているかどうかの評価が欠かせない。展示構想案の段階、実施案の段階、さらに実施時というようにいくつの段階で多くの多様な人々に評価を依頼し、修正を加えながら観覧者との対話が可能な展示をつくり上げることを計画した。結果は最後の展示実施時のみとなったが、その修正は発信のあり方に止まらず研究の方向性にも及ぶもので、この第三者による展示の評価を受けての研究課題にも及ぶ再検討と修正という過程もまた、展示という発信でこそ可能なものであろう。

展示という研究成果

研究成果の発信としての展示で問題となるのが、展示が期間限定の発信であることである。展示において批評が成り立ちにくいのも刊行物と異なり後の検証や反論が困難なことが一因と思えるが、研究成果発信としての展示ともなれば後日の検証を可能にしておくことが求められよう。この展示をつくる過程を記録に残す本報告書の刊行は、展示の映像による記録保存とともに展示構想のはじめから組み込まれたものであった。

それはまた「展示をつくる過程」そのものが研究であるとの視点にたつてのことである。展示も発信装置としてだけでなく、研究成果として他の研究同様、成果が発信され、いつでも利用と検証が可能な共有財産として蓄積されるべきであろう。日々各地の博物館において学芸員の方々によって積み重ねられている展示をつくるという営みを研究の成果として記録保存をどう図っていくかは今後の課題であり、今回の展示と本報告書がそれに向けての一つの試みになりえていればと思う。

研究から展示へ・展示から研究へ

最初にも記したように、展示スタッフも展示空間も持たない研究プロジェクトが展示による発信を選択したこと自体が一つの実験であった。そこではまず、展示が発信装置として有効性を持ち得たかが問われよう。この展示による発信ははたして従来の研究者という枠を超えたさまざまな人々に直接発信することはできたのだろうか。そして、展示による発信は身体技法を、非文字資料を伝えるのに効果的であったのだろうか。実験的試みになりえたのだろうか。本報告書にはそのために私たちが論議を重ね展示を作り上げた過程とさまざまな制約の中で実施した展示の姿を出来る限り記録した。従ってその判定

は観覧者の方々と本報告書をお読み下さる方々の手に委ねたい。

幸いこの報告書には判定の一つとなる展示評価論考を収めることができた。2008年2月24日に開催されたCOEの国際シンポジウムのセッション「身体技法を展示する」でコメンテーターを務めてくださった村井良子氏と笹原亮二氏の論考である。村井氏は展示開催中に実施した評価を踏まえて、笹原氏は民俗芸能という身体技法にかかわる研究者としての立場から展示評価を、シンポジウム終了後刊行までの限られた時間で原稿の形にご用意くださった。感謝を申し上げたい。

もう一つ問われるべきなのが発信者としての私たちであろう。展示をつくる過程を通して、また展示場での観覧者との対話を通して研究に新たな視点を獲得できたかどうかである。そこに研究発信装置と

しての展示のもうひとつの意義があるとして実施した実験である。今回の展示を私たちの一方的実験に終わらせないためには、展示で得たものを研究へ戻し返し、新たな研究成果として再発信するという試みを積み重ねていきたいと思う。この私たちの実験に皆様からの率直なご批判をお聞かせいただきたいと願っている。

展示は私たち研究プロジェクトだけではなしえないものであり、多くの方々の力添えを得た。この展示に力添えいただいた全ての方々に心よりのお礼を申し上げたい。

2008年3月

神奈川大学21世紀COEプログラム第5班代表
中村ひろ子